

## ＜ 学 会 通 信 ＞

### I. 事務局移転のお知らせ

1985年6月1日より下記に学会事務局を移転します。あわせて学会の郵便振替口座も下記の通り変更となりました。

#### 新事務局

〒259 — 12 平塚市北金目1117  
 東海大学体育学部社会体育研究室内  
 ㊚ 0463 — 58 — 1211 (内線 3508, 3531)  
 担当：西野, 川向

#### ＜新郵便振替口座＞

横浜 8 — 31789

### II. 第15回日本レクリエーション学会大会

1. 日 時：1985年10月28日(月) 9:00~16:30
2. 場 所：三重県厚生年金休暇センター  
 〒516 三重県伊勢市八町池の上1165-1  
 ㊚ 0596 — 39 — 1200
3. 日 程：8:30 9:00 12:00 1:00 1:30 2:30 4:30

受 付	研 究 発 表	昼 休 み 理 事 会	総 会	研 究 発 表	シ ン ポ ジ ウ ム
--------	---------	----------------------------	-----	---------	----------------------------

4. 大会参加費：正会員・特別会員 1,500 円  
 : 学生会員 1,000 円  
 : 名誉会員・賛助会員 無料  
 : 全国レクリエーション大会参加者 無料  
 : その他一般の方 2,000 円

#### ===== 研究発表申込み要領 =====

1. 発表資格：1985年度会費を納入した会員
2. 発表形式：口頭発表
3. 登壇回数：共同研究をのぞき1人1回
4. 発表時間：1題15分(質問3分を含む)
5. 発表申し込み手順
  - 6月28日(金) 発表申し込み受け付け締切
  - 8月10日(水) 手書き原稿受け付け
  - 8月20日(火) 編集委員会  
論文審査・添削  
投稿者に審査・添削済みの手書き原稿返送  
学会所定のタイプ用紙発送

9月14日(土) タイプ打ち上がり原稿受け付け締切

投稿者は、手書き原稿に修正を加え、各自タイプまたはワードプロセッサで活字化する。校正も自分で行い、完全原稿として提出する。タイプミス等は投稿者の責任とする。

## 「レクリエーション研究・大会発表論文集」投稿規定

暫定措置として昭和60年度は下記の投稿規定にて実施し、問題点があれば、次年度、修正を加えるものとする。

1. 投稿者は本会の会員であること。
2. 論文は他誌に未投稿のものに限る。
3. 論文は新かなづかい、制限漢字使用を原則とし、A4判、横書き、400字詰原稿用紙を使用する。
4. 論文の第一頁表題の下にはかならず氏名、所属をつけ、図版・写真にもタイトルをつける。
5. 図版はかならず白紙に墨書きとし、図版・写真類は、上下の別を明記すること。
6. 論文は、400字詰原稿用紙にて20枚以上30枚以内を原則とする。
7. 投稿する原稿は、手書きのオリジナル原稿とそのコピー3部とする。
8. 審査を通過した論文(手書き)は投稿者に返送する。投稿者は、本学会所定の用紙に和文タイプライターまたはワードプロセッサ(24ドット)にて原稿を活字化しなければならない。活字化されていないなど様式に適合しない論文は受け付けない。校正は投稿者の責任において行うものとする。
9. タイプの打ち上がりは、本学会所定の用紙に4枚以上6枚以内とする。
10. 活字化するために論文を投稿者に返送するが、かならず必要な額の切手を貼布し、宛て先を記した返信用の封筒を同封すること。

●「学会大会への派遣願」が必要な方は、返信用封筒(60円切手貼付)同封の上、事務局へご一報下さい。

## Ⅲ. 「レクリエーション研究」投稿募集

### 1. 投稿期限

今回より編集方針を改め、随時投稿論文を受け付けます。

### 2. 投稿規定

『レクリエーション研究』第13号表紙裏頁参照。尚、投稿規定第6条により、邦文摘要(800字以内)を添付すれば、「欧文摘要(Resume)については編集委員会に一任することができる。」とありますが、欧文学の作成に際しては有料(400字につき2,000円程度)となりますのであらかじめ御了承下さい。

●必ず、コピー3部を添えて提出して下さい。

### 3. 郵送先

〒259-12 平塚市北金目1117

東海大学体育学部社会体育研究室内

日本レクリエーション学会編集委員会宛

## Ⅳ. 「レクリエーション研究」続刊のお知らせ

編集委員会では下記の通り「レクリエーション研究」続刊の編集作業を進めております。

1. 「レクリエーション研究」第14号(レクリエーション関係文献目録集)
2. 「レクリエーション研究」第15号(大会発表論文集〔学会大会号〕)
3. 「レクリエーション研究」第16号(レクリエーション指導学特集号：一般投稿論文とあわせて特集論文を掲載する予定です)

## V. 後援事業・第7回全国レクリエーション指導者研究協議会報告

報告者 藺田 碩哉 (財・日本レクリエーション協会)

### 1. レク指導者の増加と社会的評価の高まり

全国のレクリエーション指導者が年に一回一同に会して研究討議を行なう場である「全国レクリエーション指導者研究協議会」は今年7回目を迎え、去る1月19日、20日の両日東京で開かれた。今回はテーマを「現場の実践に根ざした研究活動を——“レク指導学”確立のために」として、現場の指導者の立場からレク指導に関する科学的な研究活動への取り組みを課題とした。

今回のテーマが選ばれるについては次のような背景があった。まず日本レクリエーション協会が公認するレク指導者の数が着実に増加し、とくに近年は比較的容易に資格の取れる初級資格(二級指導者)ばかりでなく、アドバンスト・コースの一級、上級指導者が増えて、質的な充実が進んでいること。それらの指導者の中には、従来の地域、職場のボランティア・リーダーばかりでなく、学校、社会教育施設、社会福祉施設、病院などにポストを持つ専門的なレク指導者が増えていること。さらに指導者の養成課程も、従来の講習会と現場の経験を組み合わせて資格を付与する方式に加えて、1983年からは、大学・短大・専門学校等でレクリエーションの理論と実習の単位を修得し、それがそのまま認められて資格が取得できる制度が作られ、すでに全国で14校がこれを採用している。

こうしてレクリエーション指導者が質量ともに充実の度を加え、その社会的評価が少しずつ高まる中で、レク指導の内容についてもあらためて整理と検討の必要が感じられてきた。レク指導と言えば集会レクリエーションが中心で、指導方法は経験とカンがたより。指導のねらいをたしかめ、それにもとづく評価をするというような指導内容を高めるために必須の活動は十分に行なわれていない、というような状況から脱して、レク指導の人間のまた社会的意義を明らかにし、指導方法をより合理的・科学的なものに高めていく必要が痛感されてきたということである。

また一方では、意欲のある現場の指導者の中から研究志向が高まってきている、という事実も見逃せない。指導者の研修会や研究会が組織され、実践記録の交換

や内容分析、レク指導の効果測定やレク財(指導のための素材)研究が行なわれるようになってきた。指導者の全国研究協議会もこうした風潮を背景として今回の「レク指導学」検討に至ったわけである。

参加者は北は青森から南は福岡まで総勢70余名。二級から上級者までの現場の指導者のほか日本レク協会の指導スタッフ、大学の研究者も加わり多彩な顔ぶれであった。また今回初めて日本レク学会が後援して、現場の研究活動を支援する姿勢を示したことも特筆されてよいことであろう。

### 2. 個人・集団・組織へのレク・ワーク

今回の研究協議会ではまず総括的な検討として、レク指導の体系の見直しが提起された。これはグループ・レク指導中心のレク指導のあり方を拡張して、一方では個人の余暇生活設計をとりあげ、他方では組織レベルのレク指導として、職域や福祉施設等でのレクリエーション活動の管理・運営の問題を視野に入れようという主張である。グループ・レクにしても、単にその場を楽しくすればよい、といった“遊ばせ屋”ではなく、グループ・ワークの方法と結合させて、グループの可能性を引き出すレク指導の方向が提示された。それぞれ具体的な実践活動をふまえた新しいレク指導(この協議会では「レク・ワーク」という用語を用いた)のイメージが描き出された。

分科会での論議は、レク・ワークが当面する4つのトピックが選ばれ、それぞれ事例報告と考え方・方法論の整理が行なわれた。それぞれの要点は以下のとおりである。

第1部会は「余暇生活診断の方法」で、前述の問題提起をもとに、個人レベルのレク・ワークとしての余暇診断の方法と、それをふまえた余暇設計の実践が、日本体育大学・今井毅助教授の発表を中心に行なわれた。参加者全員がそれぞれ自分自身の余暇を狙上へのぼらせて、余暇の担い手としての個人の主体性を侵さずに余暇設計への援助を行なう効果的な方法について論じあった。

第2部会は、「レク指導の効果測定」をテーマに、特別養護老人ホームでの測定実験の報告(日本レク協

会・千葉和夫氏)を聞き、効果測定を行なうための3つの視点(テクニック、人間交流、価値観)を確認し、いくつかの測定方法について検討しあった。

第3部会は、「レク指導の記録・分析」に取り組んだ。指導経験を客観化し、指導者の共有財産にしておくために、またその経験を科学化するために記録が重要な意味を持つことを確認したあと、宇田川光雄氏(日本レク協会)が開発中の「レク指導の記録・分析表」をもとに検討が行なわれた。その成果として参加者の反応をチェックするクモの巣グラフの試案が作られ、現場に持ちかえてその有効性を試してみることになった。

第4部会は、他とは異なり「学校レク運動の組織化」という実践的かつ今日的な課題に取り組んだが、ここでも各地の実践の記録と分析の必要が確認され、全国情報誌の刊行が決議された。(この学校レク情報誌は早くも3月に第1号が刊行されている)。

記録法の定着とその分析手法の確立とは、レク指導の科学的追及の出発点となるものであろう。研究協議会での検討を引きついで、課題達成をはかるために、学会の専門分科会として準備が進められていた「レク指導研究専門分科会」に参加すべく、新たに学会会員となった現場の指導者も少なくない。かねてから主張されてきた現場と研究者の相互協力が「レク指導」というテーマのもとに実を結びつつあると言えよう。

### 3. レク運動とレク研究とのかかわり

研究協議会の最後のプログラムとして、各分科会から選ばれた報告者が「レク指導学」の構築に向けて論議するパネル・ディスカッションが行なわれた。パネラーの一人、上智大学の師岡文男氏は、レク指導学を体系化していくための柱として、①レク指導の原論と歴史、②指導方法の研究、③レク財の研究、④効果測定と評価の問題の4つのテーマをあげたが、これはこの研究協議会での論議を整理し、指導研究の方向をわかりやすく示したものと言えよう。

また師岡氏は、レク運動とレク指導学は違うものだという点を強調し、レク指導学が運動を進めるための単なる道具としての学問になってはならないと主張したが、これに対しては今井毅氏から次のような反論があった。「運動と学問を切り離せ」という意見には異議がある。レク学はレク運動がなければ起ってはこなかったという事実がある。運動の視点を欠いてはレク学

は成立しない。」

師岡氏の主張は、運動にとって都合のいい研究のみをとりあげてしまう危険がある、レク指導のマイナス面をも客観的に見ることのできる研究でありたい、ということで、研究が低次元で手段化されることのないように警告したもので、その限りでは当然のことであろう。

これに対して今井氏は、レク指導という課題そのものが、一つの社会運動としてのレク運動の中から生まれてきたもので、運動を抽象してレク研究はあり得ないとおる。ここでの運動はより深いレベルでとらえられているといえよう。つまり、レク運動を現実のレク運動体(レク協会)の表面的な動きと見るなら、レク研究はその利益に奉仕するようなものではないが、レク運動が提起する諸価値という本質的なレベルで見ると、レク研究はその価値から自由ではあり得ない。運動がなければ「レクリエーション」概念そのものが問題化されなかったはずだからである。

こうしてこのパネルディスカッションは、レク研究の根底を問う論議にまで発展し、参加者にさまざまな示唆を与えるものとなった。今後はこうした根本的な議論とともに、師岡氏の提案にある各論についての研究をつみあげてレク指導の体系を明確にしてゆきたいものである。

レク指導の現場を持つ学会員が中心となって作った「レク指導研究専門分科会」は、この研究協議会での論議をひきつぐとともに、基礎学としての「レクリエーション研究」を土台にして、その成果を広く人間教育の場に適用していく応用学としての「レク指導学」の確立に向けて活動を開始した。その成果は、おいおいレク学会大会や本研究誌に発表されていくであろう。現場の指導者や、この問題に関心を持つ研究者が、この分科会に参加することを期待するものである。